

時事英語と英語教育のはなし

押上 洋人

はじめに

不思議なことがある。私は毎週、時事英語講座の日は口ぐせのように独り言をつぶやきながらその教室に向かう。「あーあ大変だ、きついなー」「よし、がんばれ！終わったらラーメンだ！」。しかし授業後の顔はどうだろうか？授業前とは全く違った「したり顔」で、満面の笑みを浮かべながら足取りも軽やかに教室を後にする。そうーこれが何人も享受できない私だけの「特権」、私だけが味わえるこの授業の「妙味」、なのである。言い換えれば、この講座はホットな充実感を心から味わえる珠玉のひとつときであり、私のこだわりの舞台なのである。その理由は何なのだろうか？自分なりに考えるといくつか思いつく。第一に、学生の心＝熱意を皮膚感覚で触れることができる授業環境。第二に、授業後の体全体で受けとめることができる心地よい疲労感と達成感。そして第三は、以上の二つの成果が私に「精神的なゆとり」と教育現場をうまくコントロールできる「頼もしい遠心力」を作り出してくれること。それらが私の「ティーチング」エネル

ギーの源となり、その源泉はさまざまな流れとなって、すべての授業に自然なうるおい＝相乗効果をもたらしてくれる。すなわち時事英語講座は私のカリキュラムの物理的・精神的な核をなし、一週間のライフスタイルの始まりと締めくくりを意味している。

ところで、私はよく「職人」という言葉を口にする。好きなことばである。職人は、まず依頼者のニーズを念頭に長年磨き上げてきた技術と能力（研究者ではないので「脳力」はほとんど使わない）を駆使し、自分の目と勘で材料を選び、全身全霊を注いで「最高のもの」を作り出すことに生き甲斐を見出す所謂、凝り性の人間である。私はそうした職人像を教師像に重ねながら英語教育の現場の一人の教師として学生に接し続けている。これが私の英語教育に関する実践哲学である。

さて、自由選択科目の時事英語リスニング講座を英語研究室から依頼されたのはほぼ4年前。その当時の気持ちは今でも心の片隅にしっかりと残っている。そこには、責任の重大さや不安感をすっかり置き去りにして、『よし、いよいよ国際法など私の専門分野

が生かせる自分の出番がやって来た』という、ちょっとしたうぬぼれとうれしさが混在していた。すなわち私はその時を自分の目指した専門知識を利用した英語「職人」として教育に携われる時機到来と自分勝手に考えたのである。

それではここで時事英語リスニングの授業内容とその実体験に基づいた英語教育に関する私なりの一つの見方を紹介しよう。なお、ここでは時事英語についての細かい定義のスペースは割愛させてもらう。その理由は、私の考えでは、「いつかどこかで起きた」、「いまどこかで起きている」、あるいは、「起きるかもしれない」、過去、現在、未来のすべての事柄が時事英語の範疇に入るからである。その範囲はニュースで取り扱われている限り、国際政治から一芸能人の話題まですべてを網羅する、としても異論はないはずである。

受講学生の紹介

毎年春・秋学期、講座の看板「時事英語リスニング」に魅せられてたくさんの方がやって来る。定員は30名で簡単な出席カードによる抽選で決まる。受講する学生たちは2・3年生を中心に構成されている。幸運なことに、自由選択科目ということで受講者の動機づけは非常に高く、授業に向かう態度は常に真摯で、それが時間の経過を忘れる程、常にリズムに乗った軽快なテンポで授業の進行を引き出してくれる。特に、クラスのなかには必ず7、8人の海外生活経験者(帰国子女)がおり、

その人たちはただ英語ができるだけでなくクラスの雰囲気や自然な形で盛り上げてくれる。それはまさに「授業=歯車」に注がれる潤滑油の役目を果たしている。

教材の紹介

この授業はニュースビデオを教材としている。CBS・NHK・TBSの3つのニュースをビデオに毎日録画し、その中から学生が興味を抱きそうな、豊かな内容と役立つ英語表現を含んだものを選択し、ボキャブラリーリストを添えたQ & Aを主教材として作成し、そのQ & Aに英字新聞記事を加えながら各々のトピックをディスカッションの領域まで押し進める。そこでの題材はあまり高度すぎる専門的な分野を避け、グローバルイゼーションの今、学生たちの日常生活に密着した関心度の高い国内ニュースをはじめ、社会性に富んだ様々な国際的な話題をリアルタイムに近い形で選択・供給できるようにしている。

これからの課題

さて、ここで以上のことを踏まえつぎの二つの点を特記したい。その一つは「passive (受け身)」から「active;aggressive (積極性)」への方向転換の必要性についてである。学生がいままで受けて来た英語の授業はほとんどの場合、受け身 (passive) の立場に置かれたもので、質問に対し答えていく、或はその答えを選ぶのが基本

的パターンである。この様式はリスニングにも当てはまる。とくにリスニングの場合はほとんどがカセットテープで行われ教科書を見ながら答えていくのが一般的なやり方で、それは単に英語の「音」を聞くだけに終始し、真の「聴解」力をつけるまでには至っていないのが実状で、さらにニュースにいたっては大半がスクリプトに基づいた「穴埋め」や、答えを選択肢の中から選び出すもの、またビジュアルなビデオ映画教材の場合は、ほとんどが字幕の付いた物が現在も主流をなしている。

そこで私がこれから学生たちに期待することは従来の選択方式や点数至上型英語学習法から脱皮し、実社会で人と人とが向かい合って話す場合に必要となる二つの力[想像力・創造力]を十分養って、対等の立場に立てる「国際英語人」になることを目指してほしいということである。それは何も難しいことではなく、ちょっとした意識改革によって実現可能なのである。それはまず言語の原点・役目は何かということを理解する必要がある。すべての言語は人と人とのコミュニケーションの手助けであり、その媒体は間接的な文字ではなく、直接的な音声を通して成立つことが根本原理である。そこでは相手の言うことをよく聞いて理解する人 (good listener) になることが第一条件で、そしてそれに対し自分の意見を自由に伝えられる人 (good speaker) になることが必要である。しかし、本当の「英語」人になるには good speaker

は質問ができる人 (good questioner) であることも重要であることを併せて認識しておかなければならない。私が立教大学の授業で目指す英語教育はこうした実社会で求められている実用性の高いものを視野にいれながら学生達の意識を少しずつ現実に近づけて行くことである。

さて、二つ目の課題は学生たちの語彙力に関してである。受講生のほとんどはきれいな発音をしている。しかし発音と並んで重要な語彙力となるとちょっとおぼつかないところがある。それは大人社会で使われる語彙力がまだまだ不足していることである。評価の材料の一つになっている毎回のレポートをはじめ、授業中にも頻繁にそれが見受けられる。英語圏の人たちや英語専門家は『語彙の「多い・少ない」が話し手の教養と品位を知る尺度となる』とよく云う。それはある程度どんな言語にも当てはまることであるが、英語はその傾向が特に強く、それ故すべての英語教師が語彙力の増強に最も時間とエネルギーを費やすのである。

ここでちょっと唐突だが、実際の授業で試したユーモアを交えた質問例を紹介しよう。A girl is expected to get three kinds of rings during her life. (1) 「What kind of ring does a girl get from a fiance when she gets engaged?」まず学生たちの口からでてくるとばは和製英語のエンゲージ ring で正解 (an engagement ring) が得られるまで6, 7人目ぐらいまで待たざるをえなかった。

さらに(2) 「What ring does she get at the wedding?」のときはほとんどが marriage ring (正解 a wedding ring) でした。そして最後にダジャレを利かした質問 (3) 「What ring will she get after marriage?」に彼らから答えは得られなかったが、私が suffering, 2度目は少しゆっくり言うと同大爆笑。しかしこれはあまり笑い事ではすまされない。すなわち、これは suffering (苦痛) という意外に難しいことばを知っているにもかかわらず、「一般(大人)社会」で常用されることば (たとえば engagement ring, wedding ring) が不足している証しである。残念ながら、これは氷山の一角で、授業ではよく「あれっ」と驚かされることがある。したがって、彼らの本授業の最大の課題は、いろいろなニューストピックをテレビ画面を通して「大人社会」に足を踏み入れた英語を「内容と語彙」の両面から学んでいく必要があるということである。

おわりに

IT革命で火が付いたグローバリゼイ

ションの流れは、押しとどめることのできない勢いで新しい歴史の流れを創り出している。その背景にはテクノロジーの進歩を見逃すことはできない。が、その推進力の一つは何か?それは紛れもなく英語である。その英語も従来の型から「実生活に密着した実益型」への脱却を余儀なくされ、その教育的責任は大学に負うところが非常に大きい。それは教育現場を預かる教師が学生と共に21世紀に背負って行かなければならぬ重い十字架であり、それゆえ、我々教師は一人ひとりの真摯で積極的な現場の対応が学生たちの確かな未来を築く礎となることを忘れてはならないだろう。

そして最後に、学生たちに望むことは、急速な国際社会の進化と変化が進む中、自分の中に、これからの人生の揺るぎない座標軸を持つてほしいことである。それが英語であり、なおかつ実践的な「時事英語」であれば....と心から願う。

(おしあげ ひろひと

本学ランゲージセンター英語嘱託講師)